
私のヒーロー

鈴芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私のヒーロー

【Nコード】

N2858Z

【作者名】

鈴芳

【あらすじ】

正義はたくさんあって、その正義によって、もしかしたら私の正義が穢される事もあるんだ。

私のヒーローは――

（前書き）

もしかしたらいつか続きを書くかもしれない作品。（もしかして、
なので可能性としては低いです）

人には人それぞれの考え方があり、思いがあり、そして正義がある。自分だけの自分の為の正義もあれば、世の為人の為と謳う正義もあるし、世間一般的悪党と言われる連中にだって彼らの正義がある。

所詮正義とは名ばかりなのだよ。

どの正義が正しいかなんて、そんなものの大多数の人間が寄ってタカって正しいんだと喚いているに過ぎなくて、所詮はその程度の正義という事だ。だからというわけでもないが、私は正義を振りかざして私を虐げる彼女らが嫌いだ。

だって、何故彼女らの正義を遂行する為に私が犠牲にならなければいけないの？ 意味のわからない正義なんてあるだけ無駄なのに、どうして存在しているの？ 人を根暗だと罵って、人をお化けみたいだと嘲り笑い、私は傷付かないと勘違いしている。いや、傷付いているのを見て愉しんでいる？

私には彼女らの考えている事が、ちつともわからない。わかりたくもないからそれでもいいのだけど、でも、どうして私ばかりを対象にするのかには甚だ疑問を抱かざるを得ない。

だって知りたいから。でも知ったところでどうにかなるのかと言えば、それはどうだろうか。私から彼女らに何かしたいかと問われても、「特に何も」としか答えようがない。そんな私の事を、或る人は闘争心の欠如だと言った。闘争心なんてあつたところで何か良い事でもあるのだろうか。争うことなんて、疲れるだけだと思ってしまうのは——やっぱり私は少し、冷めているのだろうか。

冷たい人間である事を望んでいた訳でもないけれど、気付けば周りからはいつも言われていた。「お前冷た過ぎるって」とか、「なんか冷めてるな」とか。そんな言葉ばかりが思い出される。

別に、冷めているわけじゃない。ただ上手に感情を表現できないだけなんだ。

「辛いなら辛いと言えればいい。そんな簡単な事も出来ないのか」

「私には、それが一番難しい事なんです」

プライド、と言う訳でもない。ただ、それを言ったところで何か変わるの？ そんなつまらない事ばかりが頭に根を張り出して——結局絡まって何も言えなくなる。耐えていれば、いつか終わるからそっちの方が楽なんだと思ったから。

それだけのことなんだ。

いつだって私が我慢すれば、何もかもが終わっていく。だから我慢すればいい。辛い事も、悲しい事も、痛い事も。何もかもを、私が我慢さえすれば丸く収まるんだ。それで私の評価が下がるのなら仕方のない事だと諦める。それが未来永劫私に付きまとうのだとしても、見て見ぬふりをすればどうにかなる。どうにかなるはずなんだ。

可愛い子犬の様に、大きな目をくりくりとさせて男に媚びるオンナを見ていると、たまに、わけがわからない嫉妬の様な感情が出てくる事がある。それが一体どんな感情なのかはわからないも、とにかく不快だ。それだけは確かで——だけどやっぱり、私はそんな感情、面倒だからと置いていく。捨てて行く。

「そんなのつまらないよ」

そんなことは、私が一番わかっている。いちいち人に言われる筋合いもないし、言われると余計に不快だ。

「偽善者とか、正直どうでもいいんですよ。ただ単に、私に構わないでくれれば、それで」

「でも気になるから」

「それは何故？ 私なんて、彼女らからしてみればゴミらしいですよ？ 貴方はゴミが気になるんですか？」

ふむ。そう言って少し考える素振りをして、だけど何も言わないから私が先に言葉を発していた。

「……貴方みたいな人が偽善者というのだろうか」

「え？」

「いいえ、何でもありません」

こんな態度、冷たい印象しか与えない。わかっているけど、それに慣れてしまったから、自然に出てきてしまう。止められない。だけど彼は尚も私の中に入り込もうと私に話題を振る。

「いつも気になってたんだけど……君はさ、どうしていつも絆創膏を貼っているの？」

「……貴方には関係の無い事です」

「えーでも気になる。だから教えて。つか教えて」

「なんで私が——」

「俺が気になるからだ」

「……横暴」

「オーボーで結構！ 俺、我が儘な末っ子だし」
「何ソレ」

「ん？」

彼女らとは、違う笑いをした彼——どうしたらそんな風に自然に笑えるのだろうかと考えてみたけれど、どうにも私の中に答えは見当たらない。もしかしたらないのかもしれない。もしかしたら、どこか奥の方にひっそりと佇んでいるのかもしれない。ふと、探してみたくなった。いつもなら面倒だと思いすぐ目を逸らすのに——これは、彼の影響？

目の前で尚も笑う彼が、どうした？と私の顔を覗き込んだ。習慣で、大袈裟に避けてしまった。一瞬目を丸くした彼。

ヤバイ。

酷い動悸がする。

やってしまった。

冷汗が出てきた。

「あ……」

「ごめんね、ビックリしちゃたね」

「え……ち——」

「そうだ！ アドレス交換しない？」

「……え？」

「ほら、何かあった時に連絡くれたらすぐに駆け付けられるし、君ともっとお話がしたいし。あ、アドレスだけじゃなくて番号もちやんと教えてね」

「え」

「駄目？」

「駄目、じゃ……ない、けど」

「よかった。じゃあコレ、俺のアドレスと番号ね」

そう言っ手近にあったプリントの端を千切って、やっぱり手近にあったペンをその紙の上に走らせていく。何か意味を込めて作ったようには見えないそのアドレス、そして11個の数字。

「いつでもいいから、連絡ちょうだいね」

そう言っこの場から去っていった彼の残した紙切れには、賀川弥彦「かがわ やひこ」と名前が書いてあった。彼は、賀川という名字で、弥彦という名前らしい。

果たして彼は、私の名前を知っているのだろうか。

気付いた時、私は起ちあがって声を出していた。「待つて」廊下に響き渡る私の声——まだのんびりと歩いていた賀川くんにもしっかりと届いていた声。賀川くんはゆっくりと振り返り、「俺なんか忘れてた？」とおどけて見せる。

「か、がわ……くん」

「——ん？」

「あの、私……の、」

「知ってるよ」

「え」

「相楽弓「さがら ゆみ」」

「——正解」

「ちゃんと知ってるよ、俺。君のこと」

そう言っ笑う賀川くんに、少しだけときめいてしまった。

（後書き）

当初は語りのオンナノコが正義とは何かをひたすらに語っている予定だったお話です。。

何故こうなったのか。

きっと鈴芳がリアルで恋愛したいからなんだ！

——とか、思っていたり思わなかったり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2858z/>

私のヒーロー

2011年12月10日04時09分発行